

環境・エネルギー教育 創造・普及研究所代表

小沢 徳太郎



「平成不況」と表現される現在、書店には二十一世紀の日本経済や科学技術を論ずる雑誌や書物があふれているが、これらの著者には経済の行く末を論ずる際に工業化社会の経済の将来を左右する最も重要な要因である「資源・エネルギー問題」や「環境問題」の視点が完全に欠落している。資源・エネルギー問題や環境問題を前提にしない経済や科学技術の議論はバーチャル・リアリティー(仮想現実)の世界である。工業化社会の経

私見 直言

済を実際に支えているものは「市場原理」や「競争原理」ではなく、資源やエネルギーであり、資源やエネルギーの使用の結果、必然的に出てくるものが廃棄物に代表されるような環境問題だからである。この現実を直視すれば、二十一世紀の社会は前述の著者らが想定するようなものではないはずである。二十一世紀のキーワードは循環型社会(持続可能な社会)である。二十一世紀型科学技術文明に支えられた社会は「人権重視の明るい社会」でなければならぬ。我々が二十一世紀も「動物の次元を逃れられないこと」が理解できれば、循環型社会とはかつて一世を風靡した手塚治虫が描いた「鉄腕アトム」

21世紀型科学技術の方向

の世界や巨大な構造物の林立する空間を高速交通が縦横無尽に走り回るような「真鍋博の未来社会」でないことは明らかである。また、我々一般市民が宇宙空間で生活できる可能性もほとんどないこと、我々は地球上の限られた資源に依存し、地球上の環境に我々と我々に続く世代の生存をゆだねざるをえないことも明らかである。

二十世紀末に頂点を極めた近代工業の高い経済性を我々は「優れた技術にある」と考えがちだが、これらの技術は豊富な金属資源と石油に代表される化石燃料や電力に支えられたもので、それらの供給に制約が出てくれば、現在のような高い経済性は期待できないことを理解しなければならない。

我々は科学技術により我々の生存条件を改善し、便利さと快適さを享受してきたが、二十世紀末の今、これまでの科学技術が暮らしの快適さを奪いつつある段階に達し、我々の生存条件の劣化をもたらしてきたことを認識するに至った。二十一世紀の科学技術の方向性は「人間は動物である。ある範囲の温度と湿度の下で、光を浴び、空気を吸い、水を飲み、動植物しか食べられない」という最も基本的な人間生存の必要条件を量的にも質的にも満たすものでなければならぬ。原発への更なる依存は明るい二十一世紀型社会への転換を一層困難にするものである。